

ひとしずくの森

令和5年春の号

発行・編集

山形県源流の森

飯豊町須郷 669 - 3

いや～雨でした！

一 連休中は

今年の春の連休は天気に翻弄される九日間でした。晴天に恵まれた四月二十九日と五月三～五日は水没林を一目見ようとす
るお客様で源流の森の駐車場が埋まり、水没林の見える展望広場はイモ洗いの状態に。特にピークの四日は中津川橋から白川荘まで三キロの渋滞が発生し、通り抜けるのに一時間以上かかりました。
入場者の増に連れて常設プログラムの体験者も伸び、「これなら日曜日

のオープニングイベントも・・・」とモミ手して待っていました。

二 オープニングイベント

今年は特別コーナーを縮小し常設プログラムを中心に、新たに森のマルシェを設けてお客様の利便性を高めました。ところがです。どうしたことか前日から雨。会場準備を雨天仕様に切り替えて晴れ間を待つことにしました。

当日はシトシトと一日中雨が続く中、置賜総合支庁森林整備課 黒田森づくり推進室長を迎えて安達館長が開催を宣言、イベントがスタートしました。人気だったのはキノコ植菌体験。緑のプレゼントも予定の本数を配布し引換券切れに。館内の森の楽器体験も盛況でした。常設プログラムも連休のピ

五月十三日（日）、天童市在住のプロカメラマン大沼洋美さんを講師にお招きし、森林（もり）の写真クラブを開催しました。

県内でも有数の写真撮影スポットとなった白川湖水没林や春の源流の森を、インタープリターと一緒に撮影スポットを探しながら歩き、プロのカメラマンの指導のもと写真撮影を楽しむという初めて開催するプログラムです。

午前中は、写真撮影の基本構図や、正しいホワイトバランス調整の仕方など、美しい風景を撮影する基本的な技術を学び、そのうち実際に外に出ての撮影会となりました。撮影場所は源流の森センター裏の白川湖沿いにある元町道です。インタープ

森林の写真クラブを開催

日白川湖を撮影に来ているという方がいらつしゃいましたが、その方も知らなかった撮影スポットだったようです。午後は撮影した写真の鑑賞会をおこないました。各自お気に入りの写真を三点選んでいただき、講師である大沼

さんから講評をいただきながらの鑑賞会です。一点一点丁寧な解説をいただきました。また、そのお気に入りの三点はプリントアウトし、参加者のお土産になりました。

これらの作品については、後日、源流の森センター内及びSNS上において展示・公開の予定です。



（伊藤）



クラフト（ブローチづくり）の様子

ークを越える大車輪で頑張りました。特に冒険の森ではブルーシートを設置してお客様が濡れないようにするなど工夫しました。森のマルシェも雨の中頑張っていたきました。

とは言っても結果がすべて。今年の体験者は二百人強と前年の五分の一になりました。県や本社をはじめ、協力いただいたインタープリターやマルシェに参加の皆様お疲れ様でした。今後は雨でも安心して来てもらえる内容や広報、雨天でも出来る体験の種類を増やすなど対策が求められます。

「春の妖精」達今年も花盛りでした

雪解けが遅かった今年の春も源流の森は花盛りでした。カタクリにフクジュソウ、エゾエンゴサクやキクザキイチゲなどユリやキンポウゲの仲間が雪の消え間から慌ただしく開花しては結実し、上層の広葉樹の葉が展開すると来春までの長い眠りに着きました。
こうした彼らの生活は氷河期を生き残るための戦略でしたがそれが今では束の間早春の里山を飾る美しい風景を生み出しています。連休と共に消えた花園は来年また蘇ります。



所長イッシーのネホダレ

三 水没林は続くよどこまでも？
さて、水没林観光が体験者数に結び付かない原因の一つは、県外者が半数程度いることです。近県や関東方面を中心に遠くは関西からも来られますが、滞在時間に制限のある場合が多いのです。五月中旬以降、水没林が消えてもわずかながら見学者は続きます。こうした入場者はどう利用に結び付けるか対応が求められるところですが。

もうひとつ気付かされたのは海外のお客様を森林案内した時です。お母さんは中国語、お父さんは英語、娘さんは三か国語のご家族でした。園内の看板も説明用のボードも日本語のみでは何度も通訳を挟まないと伝えたい内容が十分伝わりませんでした。「源流の森でも今後インバウンド観光への準備を進めなければ」です。なんだかんだ勉強させられる今年の春の連休でした。

※ネホダレは置賜弁で寝言のこと
2月、冬の森林の学校を開催しました。常連の姉妹が来てくれたのですが、中学生になった姉が暗い表情で孤立し、みんなとも母親とも疎遠な感じ。心配した妹が片時もそばを離れません。家庭や学校で何かあったのか。それでも、インタープリターに励まされ雪原を歩くうち少し明るさを取り戻しました。周りとの軋轢や生き苦しさを抱えた子供達が増えた今、源流の森はこうした子供達の「安らげる場所」でありたい。「いつでもおいで、待ってるから」と。
もう一つ今年から目指しているものがあります。それは加茂水族館や県の専門機関、昆虫館や大学生等との「幅広い交流」です。コロナ明けで様々なお客様がみえますが「より広く、より深く」様々なニーズに応えるため、町外やジャンル外の方々と連携することで源流の森が「多様な人々が集い、刺激し合う交流の場」になればいいなと思っています。
様々な生き物達「森羅万象」が支え合い、競い合う森のように。

（イッシー）